平成２９年度第２回福島県総合教育会議　議事録（概要）

１　日時	平成３０年２月９日（金）１０時００分～午前１１時１５分
２　場所	福島テルサ　３階「あづま」
３　出席者	知　事　　内堀 雅雄 教育長　　鈴木 淳一 教育委員　　浅川 なおみ　岩本 光正　高橋 金一　蜂須賀 禮子　正木 好男 ＜五十音順に掲載＞
４　議事内容及び経過	
（１）開会	事務局（政策調査課長）
（２）議題	＜「頑張る学校応援プラン」の一部改定について ＞ 【知事】 議題１は、「頑張る学校応援プラン」の一部改定について。このプランは、これまでの総合教育会議においても、委員の皆さんから様々な意見を頂き、それらを反映させた形で昨年の３月に公表したところである。現在、プランの内容に沿った具体的な取組が進められているが、その中で、いくつかの課題も見えてきた。そうした状況を踏まえ、プランの改定案の内容や現在の取組状況について、説明を行った上で、意見交換に移っていきたい。 －　教育総務課長から資料 1-1 に基づき説明後、以下のとおり、意見交換　－ 【教育委員】 「頑張る学校応援プラン」について、現場の先生からは、非常に体系的に出来ていて、使いやすいと高い評価を頂いている。データに基づいて、現状や課題、取り組むべき内容が記載されていることが、そういった評価につながっているのではないかと思う。是非、学校で積極的に活用してほしい。 先日出席した、全国教育長・教育委員協議会の分科会で、「エビデンスに基づく教育」について意見交換があり、その中で、アメリカに視察に行った方が「エビデンスベースト（統計データ等の科学的根拠に基づいて政策判断などを行うこと）」の考え方についてお話しをされた。会議の中で、私からは「福島県でも、このプランのようにデータに基づいた取組をしている。」という話をしてきた。 また、教員一人一人にパソコンを配備し、クラウド上にデータを共有して効率化を図りながら業務に取り組むなど、働き方改革に向けた取組も進んでいるが、「頑張る学校応援プラン」を実現していくためには、教員や生徒の現状をしっかりとデータ等で把握し、効果的に政策に反映させていくべきと考える。

	【教育委員】 　県内の５００校を訪問し、授業改善に向け、教員に指導・助言を行うという学力向上支援チームの取組はとても良い。教員のレベルアップが、生徒たちの学力向上につながっていくと思う。 　教職員の多忙化解消に関して、部活動指導員を配置するとのことだが、部活動の在り方もしっかり考えていかなければならないと思う。公立学校では週に一日、休息日を設けるという話が出ている一方、部活動に力を入れる私立学校に生徒が流れてしまうのではないかと心配している。教員の多忙化解消は非常に大切だが、そのようなことにならないように、公立学校の特色化にもしっかり取り組んでいただきたい。 　地域と学校の協働について、現在８地域で実施されているようだが、こういった取組を更に広げてほしい。子どもの数が減っていく中で、いくら教員がレベルアップし、子どもたちの学力が向上しても、外部に流出しては損失である。地域の企業等とも連携し、地元に残ってもらえるような取組を進めてほしい。 　また、不登校の子どもたちが相当数いる中で、その子どもたちの環境整備などに向けた夜間中学について、各都道府県に１校は設置するよう求められているなど、在り方の検討がなされている。さらに、特別支援学校についても、支援が必要な子どもが増え、学校も増えていく中で、就職先なども含め地域との連携が非常に大切になってくると思う。 【教育委員】 　「頑張る学校応援プラン」にもあるように、子どもたち一人一人を大事に育てていくことが、学力向上にもつながるものと考えている。そうした中、ある学校の指導方法で、答えは当たっているのに、まだ習っていない計算方法だから不正解になったという話が聞こえてきた。このような教育を日本がやっているとしたら、海外の国々との差がますます開いてしまうのではないかと心配している。 　また、地域の方々が子どもの育成などに一生懸命取り組んでいる中、ＰＴＡの会長で見守り活動を行っていた者が子どもを殺害するという痛ましい事件があった。教職員の多忙化解消のために部活動指導員を配置するという話もあるようだが、このような事件が二度と起こらないようにするために、学校に協力してくださる方々に対しても、きちんとした研修などをしていく必要があると考えている。 　子どもたちの学力を本気で向上させたいのであれば、会津学鳳高等学校のような中高一貫教育を増やしていくべきだと思う。高校と中学校では、一般的に所管が県と市町村に分かれることから、定期的に検討の場を設け調整してほしい。 　日本の外国語教育が何を目指しているのか、分からない部分がある。受験のためなのか、英会話が出来るためなのか、それとも両方なのか。実際、私も英語を習ってきて、学校の外国語教育に疑問を持っている。今後、小学校から外国語教育が始まるが、どれだけ成果が上がるのか心配に思うところもある。 【教育委員】 　国づくりの基本は教育と考えており、私もこれまで産業界の一員として教育分野に携わってきた。

	「頑張る学校応援プラン」の多忙化解消の項目については、校長から教職員までの勤務実態に係る膨大なデータを解析し、アクションプランに反映させている。２０２０年までに時間外勤務を３０％削減するという目標を掲げているが、これは正しい選択である。一般的な会社では経営目標に対する中期計画を作っており、必ず半期毎にローリングをして計画の進捗状況を検証している。是非このアクションプランもプログラムの進捗管理に努め、「仏作って、魂入れず」にならないように、しっかり取り組んでいただきたい。 もう一点は「授業スタンダード」のチェックシートについて、教員が授業を振り返り、自己点検を行う上で非常に有効な手法である。各学校長が指導力を発揮し、学校全体で確実に取り組んで実行していってほしい。 **【教育委員】** 先日開催された、教員の表彰式で、ある高校の英語の先生が、中学校の英語でも分からないところがあれば、そこまで戻って基礎から教えているという話を聞いた。生徒のことを真剣に考えて、こういうことが出来る先生ってすごいなと感動した。 福島イノベーション・コースト構想については、福島県全体が本構想に関わってきているということを実感しており、とてもうれしく思っている。 また、今日の新聞に、来年度の予算で教育部門にかなり力が入れられており、知事の本気度が分かるという見出しがあった。それも大変うれしく思った。 **【知事】** 教育委員の皆さんの意見を踏まえて、教育長から感想を。 **【教育長】** 多忙化解消のアクションプランについては、委員の方々に素案の段階から御意見を頂いているところだが、本日の定例教育委員会で正式に御報告させていただきたいと考えている。 部活などの例を挙げて、特色化が大事との御意見があった。これは部活に限らず、次の議題である高校改革においても大変重要な観点だと考えている。学校毎に特色、すなわち魅力を作り、受験生、あるいは県民に選んでいただくという視点で改革に取り組んでいく必要があると思う。 私も昨年、今年と教員の表彰式に出席をしている。教員が不祥事を起こし、県民に御心配をお掛けしている事案もある一方で、ほとんどの教員は一生懸命頑張ってくれている。そういった方々に報いる方策がないかと検討を進めているところである。 「頑張る学校応援プラン」を策定して、もうすぐ１年になる。策定に当たって工夫した点は、文言がたくさん書いてある分厚い計画ではなく、客観的なデータに基づいて、分かりやすく、要点を絞ったところ。これらを教育現場の皆さん、保護者の方も含めて、共有出来るようにしてきたことが良かったと思っている。ただ、策定時は、「学力向上に責任を果たす」などと書いていいものかと、庁内でだいぶ議論をしたが、職員から「大丈夫です。」と力強い言葉があり、私も決心してこのよ

	うな形になった。成果も徐々に上がってきていると思う。 　また、エビデンスの話があったが、このプランもエビデンスに基づいて策定した。ただ、今後の効果をエビデンスで示していかなければならないことは、難しいところだと考えている。例えば、ふたば未来学園の生徒が県立医大に合格した、これは一つのエビデンスかもしれないが、一方で、先般、ある新聞で掲載されたふたば未来学園の特集で、生徒が「福島県の復興に貢献したい」との強い思いから、東京電力や楢葉町の介護施設に就職するという話があった。実はこれも教育の大きな効果だが、エビデンスとして数値化が出来ない。他の仕事と違って、教育の難しいところだと思う。 　このような難しい部分もあるが、今後、このプランをＰＤＣＡサイクルにのせて、取り組んでいきたいと思う。特に、福島イノベーション・コースト構想、また、大学入試制度や小学校の学習指導要領も変わるので、しっかり対応出来るように頑張っていきたい。 **【知事】** 　「頑張る学校応援プラン」について、３つ話をしたい。 　一つ目は、この「頑張る学校応援プラン」というタイトルを、もう一度見直してみたいと思う。まず主語について、タイトルの前半に「頑張る学校」とあるが、誰が頑張るのか、学校の校長なのか、教頭や先生なのか、生徒たちなのか、あるいは周りの地域の皆さんなのか、県教育委員会や市町村といった行政なのか、主語はたくさんある。「頑張る学校」と言った時の主語、誰なのかということを切り分けながら、整理することも大事。ただ、実際このプランもそういった形でそれぞれの柱立てがしてあり、結論はみんなで頑張るということだと思う。教育は全ての県民に関わることなので、行政は当然だが、地域も企業も大学も、みんながオール福島でがんばろうというのが、タイトルの前半なのだと思う。 　次に二つ目は、「応援プラン」なので、「応援する」ということもきちっと整理する必要がある。例えば、何か制度を作る、財政的な支援をする、あるいは、学校全てを行脚して直接お話をする、こういったこと全て応援だと思う。応援という言葉は、述語になるが、どのような行為をするかということを、このプランの中で改めて位置付けて整理しておくこと、名は体を表しているので、このプランの名前、誰がどう頑張るのか、あるいは誰がどう応援するのか、こういったことを整理すると、よりプランの全体像が明確になってくると思う。その応援の仕方には、いろいろなやり方があるが、やはり褒めることが大切。今の時代は、褒めて伸ばしていくことが大切だと思う。今風に言えば、「いいね」を付ける。どれだけ「いいね」が付けられるかが大事だと思うので、いろいろな場面でたくさんの「いいね」が付けられるように、褒めていきたいと思っている。出来るだけみんなで「いいね」、「この取組素敵だね」、「良い結果が出たね」、小さなことでも、褒めていくということを大事にしていくと、更に子どもたちの笑顔も増えていくと思う。 　最後に三つ目だが、このプランを出来るだけ多くの方に知ってほしいと思っている。教育関係者は当然だが、多くの方に「福島県は頑張る学校応援プランやってるんだ、知ってるよ。」と言ってもらえるように、届く発信に努めていくことが大事だと思う。「伝えること」と「伝わること」は違うので、「プランを作りました、ホ

ームページに載ってます。」だけだとなかなか届かない。それではどう届けるか。先ほどの教育長の話は、自分の思いを言葉にしているので、すごく分かりやすい。このように自分の心、思いをどう届けるかという、発信の仕方を常に工夫していく必要があると思う。

郡山駅のある新入社員が、大学入試センター試験の時に、受験生を応援するメッセージを駅の黒板に書いた。昨日、郡山駅に行って、実際にそれを見て、さらに、それを書いてくれた女性職員と会って、「とても良いメッセージだ、感激した。」と本人に伝えてきた。「そのメッセージどのくらい時間かけて作ったの。」と聞いたところ、時間を掛けずにスラスラと書いたと言っていた。学校の先生のように、きれいな字で黒板に書いてあるのだが、そこに本人の思いが真っ直ぐにこもっているので、それを読んだ受験生が励まされたり、見た大人たちが感激して、ＳＮＳで発信したりしている。応援する主体は郡山駅の中にもいて、それを見た子どもたちが元気になる。このように、「頑張る学校応援プラン」はオール福島でやっていかなければならないということの一つの証かなと思う。この届く発信というのは、今の郡山駅の女性職員もそうだが、何かを届けたいという思いが心の真ん中にあるから、言葉が生きてくるので、教育委員会でも、是非、届ける工夫ということを大事にしてほしいと思う。

このプランについて、それぞれの委員から様々な御意見を頂いているが、やはり具体的な成果につなげていくことが大切。これからも是非、教育長を中心にして、関係部局と連携をしながら、福島ならではの良い教育を進めてほしいと思う。

＜　県立高等学校改革について　＞

【知事】

それでは、議題２に移っていきたいと思う。

議題２は、県立高等学校改革について。用意された資料を県立高校改革監から説明し、その後、意見交換に入る。それでは、説明をお願いする。

－　県立高校改革監から資料 2-1 に基づき説明後、以下のとおり、意見交換　－

【教育委員】

今後、子どもの数が減少していく中で、教員の数はどうなるのかということが心配。子どもの数に比例して教員数を減らすということではなく、子どもたち一人一人に寄り添った教育を行っていくために、一定数を維持すべきと思う。

双葉郡の休校となった５校の今後の在り方については、大変重要な課題と考えている。復興の進捗状況などに応じて、柔軟に対応してほしい。

【教育委員】

２０１４年にいわき商工会議所として、２０２０年までの地域振興ビジョンを策定した際に、一番の問題になったのが若者の流出。地域で子どもたちを育てても、都市圏に流出してしまう。これは産業界にとっても大きな問題であり、ものづくりを支えている中小企業では人手不足が生じている。こうした状況を踏まえ、次世代

	を担う人財育成及び教育を軸とした人財還流の仕組みを官民一体で推進する目的で、平成２８年７月に「いわきアカデミア推進協議会」を発足させた。構成メンバーは、経済団体や産業界、教育・行政機関など、様々な分野の方々に加わっていただいている。活動の一環として、地域の歴史や文化、産業、経営者の活躍などを紹介する「いわき発見ゼミ」を実施した。地元企業の協力によりプログラムを作成し、平成２８年１２月に磐城高校の１年生３２０名が企画に参加、昨年７月には磐城桜が丘高校で２８０名、１２月に磐城高校が３２０名と、これまで９２０名が、いわき地区の会社訪問を実施した。また、後日の授業で、訪問した感想をグループ毎に取りまとめ、その結果を訪問した会社やアカデミア関係者に対して報告してくれた。 以前、知事が会合の席でイノベーション、リノベーション、コラボレーションの話しをされたが、それに例えるなら、地域に埋もれている財産を「リノベーション」して、活かしていくことが大切であり、職場体験のように、学校と地域経済界が「コラボレーション」して人財育成に取り組むことで、生徒自身が「イノベーション」を起こしていくことが出来ると思っている。 **【教育委員】** 魅力ある高校づくりについて、運動で学校の特色化が進められている一方で、例えば、科学などを専門的に勉強したいという子も必ずいると思う。大学受験のためだけではなく、一生をかけて取り組んでいきたいと思えるような、好きなことを気付くことができる高校生活であったら素敵だなと思う。 また、コミュニティースクールなどでも、地域にあるものをいかした活動が出来れば、更に良くなるのではないかと考えている。 **【教育委員】** 生徒数の減少に伴い、小・中学校でもクラスの数が減っている。そうした中で、学校の統合という話も出ており、地域の学校で自分の行きたい学科がなくなってしまうということを懸念している。また、今後は３０人学級についても検討を進めてほしいと思う。 先ほど話に出た「いわきアカデミア推進協議会」に関して、地元に生徒が残ってくれるというのが一番良い形だと思うが、子どもたちが地域の実情を知らないという現状があることから、インターンシップなどの取組を更に進めてほしいと思う。一方で、受け入れ側の中小企業における従業員の高齢化が進んでおり、後継者や人手不足も大きな問題となっている。今後は、地域と学校が更に連携を強化し、生徒が地元に残ってもらえるような取組を進め、地域経済を活性化させていってほしい。 **【教育委員】** 資料を見ると、福島県は、関東地区に比べて、普通系よりも専門学科が多く、その理由は、一次産業と二次産業の比率が高いからであるというような現状の分析は出ているが、大学への進学率を上げるということに関する内容が見当たらない。本県の大学進学率が低く、進学の希望も少ないのであれば、そうした現状を踏まえ、

	生徒それぞれのニーズに合わせた、教育をすれば良いと思う。大学に進学しない生徒たちでも、生きていく力をしっかりと身に付け、地元に定着出来るような取組を、企業と連携して進めていく。そうしたことを全体の政策の中で戦略的に取り組んでいくことが大事。 　また、福島県は広く、各地域で特色も異なる。地域の魅力を引き継いで、活性化を図っていくためには、そこで生まれ、育った人材が地元に貢献していくことが重要である。子どもの数は減っても教員の数は一定数確保して、県内どこに行っても豊かな教育が受けられるようにしてほしい。 **【知事】** 　教育長から感想を。 **【教育長】** 　高校改革は非常に大きな課題であり、教育委員会はもちろんだが、知事部局、さらには、市町村などとも連携しながら、取り組まなければならない。 　御意見にもあったように、生徒は少人数で、教員も減らさないというのが理想であり、学校の特色化も進めていきたいわけだが、費用対効果も考えながら、エビデンスをしっかり示せるように取り組んでいきたい。 　また、地域との連携について、先ほども中小企業の話がたくさん出てきたが、例えば、会津では、県の振興局と各高等学校で連携して、高校生が中小企業を訪問し、地域の企業発見ノートというものを作っている。これは高校生にとっては、地元にどんな企業があるかという勉強になるし、企業にとっても若者へのＰＲになる。このような、すばらしい取組を是非広げていきたいと思っている。 　「地域と共にある学校」というのは正にプランの柱だが、高等学校の改革は教育、学校の改革であるとともに、地域づくりにも大きな影響がある。今回、各地域で行っている公聴会には、中学生や高校生も参加して、意見を発表してもらっている。これは１０年後、２０年後の地域づくりの担い手が、今の中学生、高校生になることから、自分たちの地域をどのようにしていきたいのかということも含めて、発表してもらっている。 　今後も、教育の在り方、地域の在り方、両方をしっかりと考えながら、取り組んでいきたい。 **【知事】** 　皆さんから頂いた大切な論点、視点も含め、引き続き県立高校改革の議論を丁寧に進めてまいる。 **＜ ふくしま高校生スマホサミット等について ＞** **【知事】** 　次に、報告事項に入る。高校生スマホサミットについて、高校教育課長から説明をお願いする。

	ー　高校教育課長から資料 3-1、3-2 について説明　ー **【知事】** それでは、この件について、御意見等あればお願いする。 **【教育長】** 今回、教育委員会としては、かなり意欲的な取組として、このスマホサミットを開催させていただいた。宣言の第一条は「考えて、直接話す大切さ」となっているが、高校生たち自身も、ＩＣＴやＳＮＳだけではなく、「直接話すことが大事なんだ」と気付いていることが、良かったと思っている。ただ、座間市の事件については、氷山の一角であり、この他にも無数の危険が潜んでいるのではないかと深刻に受け止めている。今回のサミットの成果を、きちんと現場、あるいは家庭まで届けて、共に認識を共有していきたいと思っている。 **【知事】** 先週、尾木直樹さんとお会いしてきた。その際、「ふくしま高校生スマホサミットは、すばらしい取組だ。全国的なムーブメントにすべきだと思うので、是非、福島県から全国に発信してほしい。」と大変褒めていただいた。私は、このスマホサミットで子どもたち自身が決めた、「自分の頭で考えて、ルールを決めて、実行する」、この３つのプロセスが大事だと考えている。これはスマホの問題だけではなく、これから社会で生きていく上でも同じであり、仕事にも共通するもの。子どもたちが、このスマホサミットを機に、そうした生きる力を身に付けることを期待している。
（３）閉会	**【知事】** 以上で、本日の議題は終了した。皆さんから熱い思い、すばらしい御意見を頂いたことに、感謝を申し上げる。これで本年度第２回目の総合教育会議を閉じる。